
罪の王冠と破滅の黙示録

プーモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪の王冠と破滅の黙示録

【Nコード】

N1647Z

【作者名】

プーモ

【あらすじ】

ギルティクラウンの二次創作です。オリ主モノ。

西暦2039年、10年前に起きた『ロストクリスマス事件』で、ある体質を負ってしまった主人公が、原作をブレイクしない程度に暴れまわる！
……予定。

破壊者の生誕（前書き）

作者はギルティクラウン（以下ギルクラ）に嵌まってしまったため、完全見切り発車&不定期更新になります。受験生ですし。ストックも無いけど頑張るぜい！

破壊者の生誕

「感染レベル、ステージ4を確認。第四隔離施設に移動させるぞ……と、言っても聞こえていないか」

聞こえている。お前の声は、僕に届いている。

だから 止めてくれ。

僕を閉じ込めるのは、僕を死人みたいに扱うのは、止めてくれ。

「やれやれ……あの施設なら、新たなワクチンとかも手に入るかも知れんからな……お前にとってもためになるだろ。」

「たく、ワクチン接種を拒むからこうなんだよ」

止める……！

僕は、GHQヤツらの言いなりになんかならない！

僕は、僕は

「力が、欲しい？」

力？ 何のために？

「自由を勝ち取る力」

そんな力が……手に入るのか？

「君が、望むなら」

……欲しい、力が。

僕が僕であるために、僕が自由を掴むために！

「な、何だ、この反応は……ぐうつ！？」

気がつけば、僕の身体は動いていた。

身体を囲っていた大仰な機材を吹き飛ばす。

何かに火花が引火したのか、辺り一面が紅蓮の炎に包まれた。

今にも僕に飛び火しそうなそれは、一閃の下に払われた。

僕の身体の半分を覆っていた結晶は、剣の如き形を保ち、僕の意のままに操れる。

「貴様、何故！？」

僕の担当の男が、酷く取り乱している。今の今まで死人同然だっ

た僕に、今は恐怖の目を向けている……滑稽だな。

僕はその男をただ一瞥し、その場を去った。

24区第6病棟　そこで、僕は力を手に入れた。

自由を勝ち取る、破壊者の力を。

「仁、起きて」

「ん……いのり？」

重い目蓋を開くと、そこでは端正な顔立ちの少女がこちらを覗き込んでいた。ちなみに、服装は赤くてヒラヒラした服。仲間内では『金魚服』と呼ばれている、何か可哀想な服だ。

それを着こなすこの娘は楪　いのり。恐らくこの娘以外にこの服は似合わないだろう、桃色の髪をした可憐な少女だ。

彼女は僕の仲間なんだが……はて、何故僕の部屋に？

「今日は作戦会議がある、って涯が言ってた」

しまった……そういえばそんなことを言ってたな、涯。

涯とは、僕の所属する組織のリーダー、恙神 涯つがみのことだ。特徴を挙げるなら、金髪のロン毛でカリスマ性に満ち溢れたイケメン……と、これは表向きの涯。

裏ではまあ、可愛いヤツだ。これが。

「悪いな、いのり。僕もすぐ支度するから、先に」

「だめ。着替えも後」

……ああ、また遅刻したのか、僕。

目覚まし時計をちらりと見遣ると　集合時間を、実に30分過ぎていた。

こりゃ、綾瀬に投げられそうだ……いや、アルゴに殴られるかもなあ。

仕方無く、僕は外に出ようとドアのノブに手を掛けた、が。その手首に、手錠が掛けられた。

「……あのー、いのりさん？」

「何？」

あくまでお惚けになられるか。

「この、手錠(?)は何？」

「仁はすぐサボるから、見張り用に」

そういえば、前回会議忘れてどっか行ったら凄い怒られたなあ。

あ、前々回もだっけ。

その所為でいのりが僕の世話係にさせられたんだから、可哀想な話だ。

「早く行こう」

痛たたた。手首の肉が手錠に挟まってるっ！

そんなことはお構い無しに、いのりはガンガン寂れた廊下を進むと、廊下の先から強面な男が曲がってきた。

こいつも僕らの仲間、アルゴだ。白兵戦技術に長ける、云わば切り込み隊長ってヤツ。

「お、仁。どうやら、本格的にいのりが世話係になったらしいなー」

「うるさい、アルゴ(ねくら)。お前も今日は遅刻か？」

「ばかお前、今日の開始時刻遅延するって言ってただろ？ てか、ネクラじゃねえよ」

あ、そういえば、涯がそんなこと言ってたっけ。

て、あれ？ なら、なんでいのりは僕を……？

訝しげな視線を彼女に向けると、パイとそっぽを向いてしまった。僅かに頬が赤くなってるのは、時間間違えたからか……いのりにしては珍しい。

「とにかく、後30分は時間あるんだよ。飯でも食ってきたらどうだ？」

「んじゃ、そーすっかな。さんきゅ、ネクラ」

「だからネクラじゃねえって言ってんだろ！」

ネクラを華麗に無視^{スルー}して、僕はくるっとUターン。まずは僕の部屋で着替えてこようとして

「食堂はこっち」

いのりに、逆方向に引つ張られた。手首が折れそうなんすけど、マジで。

そついや手錠これしてたな……忘れてた。

「あの一、いのりさん？」

「何？」

「いやその一、食事の時くらい手錠、外して貰えませんか？」

「ダメ」

「……俺にサンドイッチにしろと、そういうことが、いのり」

「嫌なの？」

「いや別に」

「そう。なら良い」

……未だかつて、ここまで冷たくあしらわれたことがあつただろうか。答えは否、あるいはノー。

いのりはあまり感情を表に出さない娘だからなく、ま、仕方無いか。

「朝からどうしたのですか、仁、いのり」

僕が片手のみでサンドイッチを食していると、前の席に銀髪の男が座った。

四分儀。眼鏡を掛けてる知的な男で、いつも丁寧口調。組織の中でも比較的年長に位置する人物だ。こいつも僕らの仲間……というか、ここにいるヤツは大抵仲間だな。

辺りを見回すと、皆は赤いラインの入った黒いジャケットを着ていた。これが僕の所属する組織の基本的な装備、まあ制服みたいなモノだ。

「どうした、って、飯だけど？」

「仁、貴方は女性に繋がれながら食事を取るのが趣味でしたか？」
め、面倒くせっ！

僕は四分儀の相手があまり得意ではない。だって頭良さそうなん

だもの。

「いのりは僕の世話係だからね」

「誇れることではありませんよ、仁……」

確かに。僕が自分で身の回りのことを出来てないことが露呈しているようなもんだ。

彼女はあまり気にしていないようだが……これでは、僕が何も出来ないヤツみたいだ。

「いのり、これ外して？」

「ダメ」

即決かい。

……まあ、涯の命令なら仕方無いが。いのりは基本、涯の命令には逆らわないし。

そんなこんなで朝食 トーストと目玉焼きというテンプレなメ

ニューだ を戴いた僕は、いのりが食べ終えるのを待ち、それが

フリーファイニング・ルーム
ら作戦会議室へ向かった。

葬儀社（前書き）

微妙にちやうけど、連投です、はい。

葬儀社

『葬儀社』の六本木フォートアジトの作戦会議室は、筒状の縦長の部屋の最下層中央にモニターがあり、作戦実行員は各所からそれを見下ろす形を取っていた。

涯曰く、これは葬儀社のリーダーはあくまでレジスタンスのリーダーであり、権威を振るうためではないことを示す。

ちなみに六本木フォートとは、ロスト・クリスマス事件 10年前の12月に起こった、あるウイルスの感染爆発 パンデミック の現場となつた場所だ。

そう、僕が『破壊者の力』を手に入れる切っ掛けとなつた、忌まわしき場所……それがここなのだ。

閑話休題。

作戦会議室に集まつた面子を軽く見回し、一つ頷いた涯は、高らかに宣言した。

「これより我々『葬儀社』は、GHQへの反撃を開始する」

その発言に、周囲がざわめく。今まではあくまで水面下で行動してきた葬儀社が、遂に動き出すのだ。戦く者も、喜ぶ者もいるだろう。

そう、僕ら葬儀社は、GHQの支配から日本を解放するための、云わばレジスタンスなのだ。

「そのために、兼ねてからの立案されていた作戦、24区、セフィラゲノミクス研究施設より生物兵器の奪取を決行する」

今度こそ、周囲のざわめきは一際大きいモノとなつた。

順を負って説明すると、日本はロストクリスマス以降、政府が自国のみでの解決を諦め、ロストクリスマス時に投入された多国籍部隊に行政権を委譲した。

そして、件の多国籍部隊への行政権委譲を受け、国連が発足させたのが日本における暫定統治組織、つまりはGHQである。そし

て、そのGHQの本部があるのが、今回僕らが突入する24区である。

つまり、何が言いたいかと言えば……

「とは言っけど、涯。

少し無謀なんじゃないか？」

そう、先の説明から分かる通り、24区には現在の日本で一番権力を持つ者たちが集まっている。そんな地区の警備がどれだけ嚴重かは、想像に難くない。

僕の主張に対し涯は、平然とした口調で応える。如何な状況下においても冷静な彼は、今日も鉄の仮面を被っているようだ。

「事情が変わった。近い内に、GHQ司令官ヤン少将の息子、ダリル・ヤンが24区に派遣されるらしい」

「ダリル・ヤン……『皆殺しのダリル』か」

いつの間にか隣に来ていたアルゴが、苦い顔でそう洩らした。

ダリル・ヤン。17歳にしてGHQ少尉であり、人型ロボット『エンドレイヴ』新型のシュタイナーを駆る、要注目人物だ。

操縦技術云々よりも危険なのが、その思想なのだが……今は割愛しよう。

「ヤツが加われれば、作戦決行は今以上に困難となる。となれば、手早く済ませるべきだ」

涯の意見に、満場が一致した。流石カリスマリーダー。

「では、作戦パターンを説明する前に、大まかな基本作戦を伝える。今回、生物兵器を奪取するのはいのり、お前だ」

僕、の隣の少女に、視線が集まる。だが、好奇や同情の視線ではなかった。

彼女だって葬儀社の一員であり、その実力は極めて高い。反対する者は、いなかった。

「勿論、皆はいのりの支援に当たって貰う。そして 仁。お前には、今回囿になって貰う」

その、あまりに冷徹な一言に、再び周囲のざわめきが大きくなっ

た。

「涯！ いくら仁でも」

いのりは慌てて涯を止めようとするが、残念、僕の方が早かった。僕は、いのりの前に空いてる左手を上げた。

「やるよ、涯。制限解除は？」

「level thirdまで引き上げる」

「ん、分かった」

やれやれ、人使いの荒いこつて。

thirdか……使うのは何カ月振りだろうか。

前使った時は、全身筋肉痛で1日動けなかったな。

しかも、最近はfirstしか使ってないから、身体が鈍って仕方がない。

そこで、僕は涯に提案する。

「涯。綾瀬の『ジユモウ』と模擬戦がしたいな」

どこからか、ゲ、と声が洩れた。綾瀬か。ゲ、とは酷いな、ゲ、とは。

「良いだろう。お前はどうか、綾瀬？」

「は、はい！ 大丈夫です」

涯の鋭い視線の先で、車椅子の少女が上擦った声で応えた。

茶髪のポニーテール少女、名前は篠宮しのみや綾瀬あやせ。

葬儀社のエンドレイヴ操縦者である。『ジユモウ』とは彼女のもう一つの（一つは車椅子）愛機である。

端から見れば、さぞかしそれは異常な申し出だったことだろう。

元来、エンドレイヴは対個人用に出来ている訳ではない。十や二十、それ以上の多人数、または兵器相手を想定して作られた代物だ。だが、今回囿になる以上、エンドレイヴの相手は必須だ。

破壊はせずとも、動きを封じるか、最悪引き付ける程度の働きはしなくてはならない。

つまり、エンドレイヴとの模擬戦は、一石二鳥で手間が省ける。

綾瀬の了解も戴けたことだし、今回はsecondくらいは使う

かな。

『綾ねえ、準備オーケー？』
エンドレイヴ『ジユモウ』の内部に、聞き慣れた女の声が反響する。

オペレーターであるツグミの最終確認に、私は思念で是と返した。
エンドレイヴに搭乗している間、搭乗者の意識、感覚、果てはダメージも機体にリンクする。

死なないための救済措置もあるが、今回は模擬戦。アレの出番もないでしょうね。

はあ……それにしても、何故こんなことになっちゃったんだろう？
涯さんの命令だから仕方無いけど、またアイツの相手をするなんて……前戦つた時は、この子の片腕がイカれたのよね。

はあ、『ジユモウ』に申し訳ないわ。
『ちよつと仁！ アンタ、またジユモウに傷つけないでよ！』
「んなこと言われても……」

確かに、普通の人間相手なら酷い話かもね。いや、どうせ傷なんかつけられやしないか、涯さんでもなし。

ともかく、普通のヤツならこんなこと言わないけど、仁は完全「アイツ」に例外。

「おーい綾瀬。そろそろ良いかー？」
気の抜けた声を掛けてくる仁を見て、こめかみに血管が浮かぶ。
何故だか、アイツを見てるとイラッとする。

あ、そっか。アイツが作戦会議とかで遅れて涯さんに迷惑掛けるからか……そう思うと、頭にヒシヒシと血が集まってくる感じがした。

『手加減抜きで行くわよ！ 覚悟しなさい、仁！』
「うお、迫力すげえ」

自身の5、6倍はあろうか高さのエンドレイヴ相手に、仁は全く

動じる気配を見せない。

そして、仁の口から アイツの力の枷を外す言葉が紡がれた。

『apocalypse breaker (破壊者の黙示録)』

limit over (制限解除) …… phase second

(第2階層) 『

細胞兵器奪取作戦

「ふいー、やっぱ久々のsecondは辛いな」
首をコキリ、と回し、僕は大きく伸びをする。

そんな僕の背後から、エンドレイヴ『ジュモウ』の、搭乗席解放の圧縮空気が聞こえた。

中から、車椅子の綾瀬が出てきた。うん、ありゃあ相当ご立腹の様子

「辛いなー、じゃないわよバカ！ アンタの所為で一部破損しちゃったじゃない！」

と、物凄い剣幕とスピードで僕の下に（車椅子で）走ってくると腕を掴まれて、あれ、景色が反転

「ひでぶつ!？」

逆さまになった景色が、そのまま暗転ブラックアウトしました。

ああ、模擬戦だからいのりの手錠外して貰って正解だったわ。

やれやれ、あの仁バカめ……まあ、腕は鈍ってはいないようだ。それを、俺のすぐ目の前……武装を使い果たしたエンドレイヴ、『ジュモウ』が物語っていた。

熟練者が使用すれば、万人単位の虐殺すら可能なエンドレイヴの兵器、その全てに狙いを定められ、しかし仁は無事だった……まあ、流石に怪我はしているがな。

それも、ヤツの回復力なら一時間と経たず治ることだろう。
仁が囷役なもの、この体質故の判断だ。

どの道、作戦のためには囷の存在は必須であり、最重要要素。
生存率の最も高い仁に任せることが、リーダーである俺に出来る最善の作だ。

「涯。作戦決行は何時なのですか？」

「明後日の1800だ。皆、それまで各自用意をしておけ。休憩も怠るなよ」

皆一様に頷き、その場を去っていった。

さて、この場に残ったのは涯おれと綾瀬、四分儀にいのり、そして…
…未だ目を回すこのバカ、大沢おおさわ 仁のみだ。

「おい、仁。そろそろ起きたらどうだ」

「あいあいさー！」

やはり寝た振りか…絶対フケろうとしたな、コイツ。

「今回ばかりは、お前にも作戦パターンを全て覚えて貰う。異論は認めん」

「ええ、だってあんなん覚えきれぬ訳げえ」

セリフの途中で襟を後ろに引っ張られると、こうなるのか。

「何言いつてんのよ！ 皆やってることなの！ アンタもやりなさい！」

「ふむふむ、何々…作戦パターンA 1、エンドレイヴ3機が2、1の比率で奪取組、囷に分断された場合の対処…」

数秒後、仁の頭から煙が出てきた。そんなパズルみたいにした覚えは無いらだが。

「やつぱ無理だよ……」

「頑張つて、仁。私も手伝うから」

失意で床に手を着いた彼に救いの手を差し伸べたのは、俺の隣にいたいのりだった。

「マジ!? ふ、いのりに教えて貰うならこの程度、3日あれば覚えてやるぜ」

「作戦決行は2日後なんだが」

「すみません、1日で覚えます……」

皆そうしてるがな、と付け加えると、仁の動きが一瞬止まったが…
…まあ、問題は無いだろう。多分。

さて、俺は俺で、後々の作戦に備えるとするか……

「作戦パターン B 78、作戦パターン F 39、作戦パターン G 15」

「何やかんやで作戦当日作戦パターン A 4。」

日も落ちかけ、辺り一面が夜の闇と夕方の紅い光が混じりあう街中作戦パターン E 80。

近くの廃ビルに点々と潜むは、僕ら葬儀社だ作戦パターン C 2
1。これより僕らは、闇に乗じて作戦を決行する作戦パターン I 42。

「作戦パターン A 92、作戦パターン D 77、作戦パターン作戦パターン作戦パターン作戦パタ」

「パタパタうるせえ！」

「どうしてこうなった……」

僕の隣でアルゴが額に青筋を浮かべ、涯が額に手をやっているパターン。

一体どうしたんだろうパターン。

「どうやら、作戦パターンの量が脳内の容量を越えていたようですね」
ね

いつも通り冷静に、四分儀が分析してるパターン。

「パターンパターンパターンパターンパターンパターンパターン」

「うるさい」

いのりに銃のグリップで殴られました。

「のがいつ!？」

はっ、僕は今まで何を……!？

「ナイスだ、いのり」

「一緒に作戦パターンも全部飛んだようですがね」

作戦パターン……? なんだらう、その単語を聞くと頭がズキズキ痛む。

「この際だ、仁には自分で何とかして貰う。……突入まで、後57

秒

「何やら頭が痛い、まあいい。涯が、作戦決行のカウントダウンを開始した。」

「34秒」

皆に緊張が走る中、僕は独りでに、解放の言霊を紡ぐ。

『『apocalypse breaker (破壊者の黙示録)』
limit over (制限解除)……phase first (第1階層)』

僕の身体の中を、超ミクロンサイズの結晶が侵食する。そして、それが僕の細胞の一つ一つを、活性化させていく。

僕の身体能力が、常人を遥かに越えたところまで到達したところで

「作戦開始！」

涯の号令に続き、葬儀社のメンバーが続々と動きを始めた。

かく言う僕も、傍らに置いてあったアサルトライフルを二挺、それぞれ片手に持った。

この状態……firstの^{スペック}身体能力なら、アサルトライフルの一挺や二挺、その反動を打ち消すくらいは造作も無い。

僕は皆がいのりの支援を開始する中、唯一人そこから真逆の方向に向けて駆ける。

言っておくが、ハブられてる訳じゃないからな。

囧が本命と逆方向で戦うのは、当然だろう。

「おつ、敵さんはつけ〜ん」

24区の東側の橋、その200メートル程先に、敵兵七名を確認。装備は僕と似たようなアサルトライフルを各一挺……戦備の足しにするか。

僕は壁に背を当てながら敵の様子を窺う。囧だから派手にやっても良いが、まずは奴等から銃をパクろう。

敵兵が、意識を他所に移した直後、僕は猛進の勢いで壁から背を離した。

敵はこちらに気づいていない。まず、一步。

渾身の力で踏みつけたコンクリートに、僕の足形から放射状にひび割れが起こる。

そして、僕と言えば、まずは20メートルを一步で進んだ。続いて、再度地を蹴る。

先の踏み込みの爆音でこちらに気づいた敵兵三名に気づかれた時には、僕と敵の距離は70メートル程。

アサルトライフルの引き金を絞る。

銃閃が瞬き、敵の腕や腹を貫いていく。が、何人が仕留め損ねた。下手つくそだな、僕。

「貴様、何者だ！」

うーん、応える必要なんてないんだけど……ま、困だし、派手にいくかな。

「通りすがりのテロリスト、大沢 仁様16歳！ どうぞお見知り置きをつてなあ！」

アサルトライフルを空中に放り投げ、敵の注意を逸らす。

同時に、重いアサルトライフルが手元から消え、僕の身体はより軽くなる。

先より遥かに強く、それでいて不必要に地面を破壊しない踏み込み。

既に敵との距離は40メートルを切っていたが、その刹那で敵の間を通り過ぎた。

放り投げたアサルトライフルをキャッチし、二人の背中を撃ちまくる。

残った一人にも銃弾をお見舞いして、潜入成功だ。

敵からアサルトライフルをかき集め、取り敢えずマガジンだけ抜いて、二挺を載っていく。僕が元々持っていた二挺は……棄ててもいいかもだが、四分儀や大雲に何言われるか分からないし、止めておこう。

僕は肩に掛けるホルスターみたいなモノの背中にライフル二挺を

挿し、残りを両手で持った。

何はともあれ、取り敢えず……

「こっからがショータイムだ。派手に楽しもうぜ？」

僕の眼前に現れた、三機のエンドレイヴに向けて、そう言い放つ
のだった。

細胞兵器奪取作戦（後書き）

集が出るのは何時になるのやら。

破壊者の黙示録

地面が揺らぐ音が聞こえる。きつと、仁とエンドレイヴの戦闘が始まったんだと思う。

私、樫　いのりは、パイプ沿いに施設内への侵入を図っていた。今回の私の役割は、件の細胞兵器……ヴォイドゲノム？　をこの施設から持ち出すこと。そのために、多彩な機能を持つふゅーねるが、私の足元に着いてきていた。

人の気配を感じ、咄嗟にパイプ付近に横になって隠れた。服のヒラヒラした部分は、ちゃんと手に持つてるから平気。

敵が去っていく。やり過ごせたようで、私はほっと息を吐いた。不意に、耳の通信機から、通信開始のノイズが掛かった。

『……聞こえる、いのり？』

「うん、聞こえてる」

通信相手は葬儀社のオペレーター、ツグミ。通称はブラックスワンって言う。スワン、て白鳥じゃないの？　とは、多分葬儀社の誰もが一度は当たる壁だそう。まあ、『egg i s t』の曲でも矛盾してる歌詞とかあるし、そういうセンスみたいなものがあるのかも。『その先の扉だよ。ふゅーねる、よろしくっ！』

ういーん、とツグミに応えると、ふゅーねるは関節から細い腕を出した。そこから鍵となる情報を読み込み、入力すると、圧縮空気が音と共に扉が開いた。

「ありがとう、ふゅーねる」

扉の奥は白い廊下になっていて、私はその中を真っ直ぐ進む。

風景感が無さすぎて、どこに罠があるか分からない……用心しくちゃ。

と、思ってた矢先、目の前に重厚な扉を見つけた。一本道である以上、ここを通るのは当然だから、さして気にも留めなかったんだけど……

『いのり、そこだよ！ 例の細胞兵器！』

随分、簡単に辿り着いちゃった。多分、仁が頑張ってるお陰だ。

「ふゅーねる、お願い」

部屋の中央には、簡素な柱が一本、鎮座していた。

ふゅーねるがそれを解析し、開くと、中からケースに入ったシリ
ンダーのようなモノが出てきた。

これが、ヴォイドゲノム……

『……ヤバ！ いのり、今すぐ退いて！ そこがバレたわ！』

私がそれを不思議に思っただけで見ていたら、ツグミから退去命令が出
された。

流石に、戦力全てを仁に注ぐことは出来ないみたい。

「分かった。おいで、ふゅーねる」

私は急いで部屋を出ると、白い廊下を抜け、再び建物の外に出た。

『いのり、前方の左角から敵兵二人が接近！』

ツグミの指示を受けて、私は拳銃二挺を抜いた。

自慢みたいだけど、私は射撃が得意。片手で拳銃を扱うことくら
いは簡単に出来る。

つまり、二人くらいなら……一度の攻撃で倒せる。

敵が曲がってきた瞬間に、私は拳銃の引き金を引いた。

短い銃声の後、彼らの身体から赤い飛沫が舞った。

正直、人を手に掛けるのは嫌い。でも、皆のためならやれないこ
とはない。

私は地に伏す男たちを一瞥すると、すぐにその場から去った。

「行くぜ、人型ロボット！」

僕は身体能力を十全に活かし、高機動戦闘に長けるエンドレイヴ
に対し、小回りで翻弄する作戦を取る。

が、量産型とはいえエンドレイヴはエンドレイヴ。そのスピード
は、やはり人間の域を越えた僕にも相手は難しいようだ。

超速で地を蹴り、横にステップした僕の動きに合わせ、敵機は滑るように移動してくる。

流石にヤバイ 敵は大口径ガトリングの銃口を、こちらに向けている。

あんなの食らったら、身体に穴が空くどころか木端微塵になる。

今の状態なら、な。

「『apocalypse breaker（破壊者の黙示録）』
limit over（制限解除）……phase second
（第2階層）！」

僕の身体を、蒼白い光が覆う。そして、僕の身体の内側から、蒼の結晶が出でる。

「こいつ……アポカリプス患者か!?!」

へえ、意外だな。エンドレイヴ搭乗者が音声を通すなんて。それに免じて、僕も話に乗ってやろう。

「いかにもだ。僕はアポカリプスウイルスに侵された だが、お前たちも分かっているだろう?」

アポカリプスウイルス。ロストクリスマス事件の際、感染爆発を引き起こしたウイルスだ。

GHQが日本の暫定統治に踏みいることが出来たのも、このウイルスのワクチンを生成出来たから、という側面が大きい。

そして、このウイルス最大の特徴は、正しく僕の纏う結晶だ。

アポカリプス患者の症状は『ステージ』で表される。ステージ4ともなると身体から結晶が滲み出て、意識を失う。

本来なら、な。

しかし、僕の身体はどういう訳か、ワクチンも無しにアポカリプスウイルスを御してしまったのだ。

しかも、ただ御しただけではない。その力を、自分の力に還元する術を覚えたのだ。

先見せたfirstは、アポカリプスウイルスによる身体能力の大幅な増幅。

そして、今僕の身体を覆う結晶が

『食らえッ！』

僕の思考を遮り、大口径のガトリングが火を噴いた。

数多の銃弾が僕の身体に当たり、あまりの衝撃に吹き飛んでしま
う。

『は、ははは！ どうだアポカリプス患者！ 病人は病院で寝てる
べきだったな！』

高らかに囀るエンドレイヴ搭乗者。全く、機体性能にばかり拘
り、搭乗者の育成も儘ならないとは…… G H Qの人手不足も甚だし
いな。同情はしないが。

僕は、身体の上に積もった瓦礫を蹴りあげ、すぐさまエンドレイ
ヴの背後に着く。

『何ッ！？』

「生憎、僕の身体は特別でね！」

とはいえ、流石に生身で大口径ガトリングを受け止められる程、
僕の身体は頑丈じゃない。

僕の身体を守ったのは、アポカリプスウィルスの大きな特異点、
身体から出でる結晶だ。これを生成する力こそ、僕が *second*
と呼ぶモノである。

本来、この結晶の硬度はそこまで高くないのだが、僕の結晶の硬
度は相当なモノだ。

現に、僕をガトリングの凶弾から守ったのだから。

まあ、衝撃は殺し切れないし、ガトリング食らって壊れちゃった
んだけど。

幸い、結晶は体力とアポカリプスウィルスの力が残る限りは出し
続けられる。

僕は再び結晶の鎧を纏うと、エンドレイヴの背に乗った。

涯に聞いた話だが、エンドレイヴの弱点は首裏だという。死角で、
敵の攻撃が届きづらく、関節部分を狙える。これ程優位な場所は他
にあるまい。

僕は二挺のアサルトライフルの銃口を首裏に向け、引き金を絞った。

乾いた破裂音が響く。

エンドレイヴは機能を停止させ、その場に倒れた。

「まず一機。さて、次はどっちだ？」

「く、くそっ！」

敵は戦いたのか、距離を空けて攻撃してくる。

好都合だ。僕としても、先のガトリングによるダメージが大きい。二人がかりの近接戦闘だったら、10分も持たなかつただろう。

ミサイルを避け、爆風を結晶で防ぎながら、僕はアサルトライフルを連射した。

エンドレイヴの装甲には無意味かも知れないが、威嚇にはなるはず。

僕はただ、時間を稼げば良いんだ。

引き分けに持ち込むだけで、僕の勝ち。そして、臆病者のコイツらに、負ける道理など毛ほども無い。

アサルトライフルの銃火に照らされた夜の闇の中で、僕は勝ちの決まった戦いに身を投じるのだった。

破壊者の黙示録（後書き）

いのり可憐なよこののり。

第6病棟の悪魔

「はっ、はっ……!!」

失敗した……!

『ヴォイドゲノム』を奪還したまでは良かった。けど、敵の包囲が予想を大きく上回って早かった。

私はあつという間に発見された。ようやくと配管の隙間を縫って、24区と東京都を結ぶ跳ね橋まで辿り着いたのだ。

しかし……私の後ろでは、エンドレイヴ一機に加え、多数の兵器が私に狙いを定めていた。

爆炎と衝撃が辺りを破壊しつくして、私の行く手を阻む。

このままじゃ、逃げ切れない……!

仕方無い。私は、ふゅーねるの中に『ヴォイドゲノム』のシリンドラーを預ける。

これで、最悪私が捕まっても、涯の元にコレは届くはずだ。

私が安堵をの溜め息を漏らした、その時。私のすぐ隣に、小型ミサイルの一撃が届いた。

爆発と爆風が、私の身体を吹き飛ばした。

闇が覆う空中に投げ出された私は、為す術も無く、橋の下の海へ落ちていく。

皆、涯、仁……ごめん。

そうして、私の意識は途絶えた。

『いのりーッ!』

エンドレイヴ『ジユモウ』に乗った綾瀬が、落ちていく彼女の名前を呼んだ。

いのりは、ふゅーねるに例のヴォイドゲノムを任せ、そのまま東京湾に落ちた。

「くそっ！」

僕は囿の役目を放棄し、エンドレイヴ二体に、フラッシュ・ゲレネード閃光弾をくれてやると、いのりたちがいた、隣の橋まで跳んだ。

距離があまりに隔たっていたため、流石に一回の跳躍では難しかったものの、24区内部の建物の屋上を経由し、交戦する葬儀社のメンバーとエンドレイヴの間に割って入った。

「仁!?!」

「加勢する! 大雲たちはいのりを助けてやってくれ!」

綾瀬の狼狽する声を背に、振り返らぬまま僕は短く告げた。

皆が後退していくのを確認し、僕は改めて前を向いた。

エンドレイヴが、実に六機。

これだけの数のエンドレイヴ相手に、一機と歩兵一人ではあまりに荷が勝ちすぎる。

だが、僕は一步も退くつもりは無かった。

「綾瀬…… thirdを使う。僕の身体を頼んだよ」

綾瀬が息を呑むのが聞こえた気がする。まあ、あれを相手取ったことのある彼女には仕方無いことかな。

と、いい加減にこちらも痺れを切らしたようで、僕らを取り囲むように輪を狭めていった。

「まあ、そう慌てるな。焦らなくても、魅せてやるさ」

綾瀬を退かせ、僕は第3の禁呪を紡いだ。

「apocalypse breaker limit over
…… phase third」

指令を受けた結晶群が、僕の身体から突きだし、左手に集中していく。

やがてそれは、剣の形を成した。

「さて、僕がこの剣を執るからには、君たちに勝ち目は万が一にも無い。……退くなら今だ」

目一杯の殺気を込めた警告は、しかし機械人形の中の彼らにまでは届かなかった。

いかな武装を携えようが、歩兵は歩兵。六機ものエンドレイヴが負けるはずがない。

そう、高を括っていたのだろう。

……残念だ。僕も、あまり暴力は好きじゃないんだけどな。

僕は、敵機に向けノーモーションで跳躍する。タイムラグがほとんど無いままに　エンドレイヴ二機の、左右の腕を切り落とした。

『い、ぎゃあああああ!?!』

片腕を失った二機の搭乗者が、痛みのみあまり絶叫する。

エンドレイヴとその搭乗者の感覚はリンクしている。腕を切り落としたから、腕が無くなることは無いだろうが、腕の神経系に異常をきたすことだろう。

一応、配慮して利き手でない方の手を切りつけてやった。まあ、トラウマになって二度とエンドレイヴには乗らないだろうね。

本来、エンドレイヴには『ベイルアウト』なる、機体との通信をオペレーターが無理矢理断絶させ、搭乗者へのダメージを抑える手法があるのだが、流石に時間が無すぎた。

動けなくなる二機をただ一瞥すると、僕は剣を下段に構えたまま、残る四機を睨み付けた。

先の僕の戦い方が。

今の僕の鋭い瞳か。

はたまた、僕の握る結晶の剣か

僕の様相を見ていたエンドレイヴから、不意に言葉が洩れる。

『貴様、アポカリプスウイルスを超越したその身体……』第6病棟の悪魔『か!』

あ、バレた。

僕はGHQの連中から『第6病棟の悪魔』と呼ばれている。それは、僕が『apocalypse breaker』を手に入れたのが第6病棟で、そこを破壊してしまつことに起因する。

全く、高校生捕まえて『悪魔』だなんて、随分酷い言い様だ。

ま、仕方無いことだけだ。

『ぜ、全機突撃！』

『待て、お前たち！』

僕に恐怖したらしい男が、全員に突撃の命を下す。唯一動かないのは、僕の正体を看破した一機のみ。

彼の制止も聞かず、三機はこちらに銃口を向け、肉薄してくる。愚かな

僕は、馬鹿みたいに一直線に突っ込んでくるエンドレイヴに対し跳躍、三機の上を取った。

「コイツで終いだ！」

剣戟は一瞬の元に。

僕の剣は空を薙ぎ、空気の刃となって三機を切り裂いた。

切断面から紫電が瞬き、刹那の余韻を残して爆発した。

残るは、戦いた僕の正体を知る者ただ一人。

「さて……まだやるかい？ 降伏するなら、エンドレイヴを降りて逃げな。見逃してあげるから」

エンドレイヴは強力な兵器だから、今後のためには一機でも欲しいところだ。戦備増強のための交渉。その効果はまあ、僕の力が分かっているなら潤滑に進む、そう思ったんだが。

「……ひゃれ？」

力、が、入らにゃ……

……やべ、thirdの副作用だ。

僕の身体から力が抜けて、そのまま倒れてしまう。

thirdは、その強大な力故、アポカリプスウィルスの要求する体力が異常に多い。

しばらく使つて無かったから、体力落ちてたんだな、こりゃ……半日は休まないと、力出せないかも。

が、当然目の前の敵は、僕がふにゃふにゃな今が好機と捉える訳で、そのガトリングを僕に向けてきた。都合の良い奴だ。

こっちにも味方がいるって忘れてるな？

眼前の銃口が火を噴くよりも早く、綾瀬の駆る『ジユモウ』の大

口径ライフル弾が敵機に命中した。

損傷は、ガトリングを着けた方の肩。これで、銃が僕を狙うことは無くなった。相変わらず良い腕だな、綾瀬。

『ちよつと、ふにゃふにゃになってんじやないわよ、仁！』

「ひょーがないひゃん（しょうがないじゃん）。

ひゅーどちゆかったんりゃから（third使ったんだから）」

『やかましい！ シャキツと喋りなさい！』

んな無茶な。

反論を一蹴し、綾瀬は僕を肩に乗せたまま後退していく。

「そんじゃ、ばいばいきーん」

僕が手を振ると同時に、小型ミサイルの雨が敵機を襲った。

さっすが大雲。いい仕事しやがるな。

『……アンタ、ちゃんと話せるじゃない！』

……いけね、バレた。

王冠の少年

あの後、明け方まで続いた懸命の搜索も虚しく、結局いのりは見つからなかった。

ふゆーねるもいのりと一緒に落ちたらしく、行方不明……ヴォイドゲノム奪取作戦は、微妙と言わざるを得ない結果となった。

目下、葬儀社全員に無期限で与えられた任務は『ヴォイドゲノムの搜索』。いのりとふゆーねるは含まれていない。

涯は真面目だから、任務に私情を挟まないのも分かるけど……ちよつと冷たい気もする。

「やれやれ……ツンデレってヤツか、涯？」

「誰がツンデレだ、馬鹿。お前は黙って寝てろ」

諭された。涯、冷たい。

「へいへーい、つと」

先の奪取作戦にて使用したthirdの副作用が、今になって僕の身体を蝕む。ま、^{ただ}重度の筋肉痛なだけだ。

「ほんつと、情けないわよね」

「体力落ちたんじゃねえのか？」

綾瀬とアルゴの辛辣な口撃（誤字にあらず）に、ぐ、と反論出来ずに言葉が喉に突っ掛かった。ぐうの音も出ない、ってこついつこつとを言うのか。

確かに、僕は以前なら余裕で一時間はthirdでいられた。しかし、今回の作戦では、五分を切っている。

こりゃ、僕もちゃんと身体慣らさないと……

しかし、それよりまずは回復を優先しなくては。という訳で。

「おやすみ」

僕はベッドに潜り込むのだった。

「ふう……編集でもするかな」

今日は風も無いし、比較的良好的な天候だ。

昼食時間、僕は映像を編集するために部室　　萎びた廃墟みたいなところだが　　へ向かう。

考え事をしながらでも辿り着けるくらいには、通い慣れた場所だ。だから僕は、この日に限って、似合わない哲学的（？）な事を考えていたのかも知れない。

ロストクリスマス以降、GHQに支配された世界は、僕らに嫌ってくらいに教えてくれる。

僕たちに、大切なモノを守る力なんて、ありはしないんだって。

僕は正直、友達付き合いが苦手だ。

だから、今日も誰もいない部室で、誰とも話さず、誰とも関わらないまま、昼食を終えるはずだった。

先に気づいたのは、僕。

何の気無しに踏みいった廃墟^{ぶじつ}。相も変わらず床の石畳には雑草すら生え、壁には錆が出来ている。

二階に上がる階段の、登れば軋みそうな頼り無さ。どれも、見慣れた風景だった。

だけど、彼女がいるだけで、このボロボロの廃墟が、そういう演出のステージに思えてくるのだから　　僕はとことん、『egoist』の、『st』の、櫛　いのりのファンなのだと実感出来る。

そう、僕の目の前には、インディーズバンド『egoist』のヴォーカル、櫛　いのりが座っていたのだ。

でも、何故こんな場所に？　ドッキリ？　ロケ？　わざわざこんな辺鄙な所に？

色々考えていた僕だが、僕の混線していた思考は、一気にクリアになる。

彼女が、背中越しにしか見えなかった彼女が、ほんの少しだけ、こちらを向いた。

向いた、というよりは、ただ肩の具合を確かめるような仕草だった。

たが、それでも彼女の横顔は、確かに網膜に焼き付いた。

画面越しに見るより、遙かに綺麗だった。花のように儂げで、雪のように白い肌。

絹のような桃色の髪も、あまり感情を表に出さない表情も、紛れも無く僕が焦がれた少女のそれだ。

口について出た言葉は、

「君、もしかして、」

馬鹿僕、違うだろ。どう見てもいのりさんだし、初対面の相手にいきなり話し掛けられてもビックリするだろうし、それに普通挨拶が先だろうし

カラン、と。

僕の下手な第一声にやや遅れて、間抜けな音が響いた。目の前の女性に目が行って、足下に気づかないとは僕もまだまだ、と思っただころで。

謎の小型四足歩行ロボのワイヤーに、足を絡め取られてしまい、転ばされてしまった。

「うわぁっ!」

あ、危ないな! 何をするんだ、あの小型ロボは!

と、その方を怨みの籠った目で見る前に、慌てて警戒しまくりのいのりさんの方に向き直る。

「いやあの、違くて! 別にそういうつもりじゃ……」

ぼ、僕は何を弁明しようとしてるんだ……!?

僕の言葉を聞き入れようとしない彼女は、ジリジリと後ろへさがって行き、コツン、と頭を机にぶつけた。

「?」

彼女は不思議そうに後ろを向く。ヤバい、アレは !

彼女が見ているのは、青い空に散り散りに浮かぶ雲、今羽ばたこうとする鳥たち……なのだが。

「そ、それまだ作ってる途中なんだ!」

しかも、下手に他人に見せたことないから超恥ずかしいよ!

どうしよう、いのりさんに女々しいとか下手とか言われたら立ち直れる気がしない。

僕が全力で目を瞑っていると、予想外の言葉が、彼女の声で聞こえた。

「綺麗」

「……へ？」

思ってもみなかった言葉に……僕の心が歓喜で満たされ始め、自然と表情が明るくなった……気がする。

思い切つて、というかこの勢いを借りて、僕から彼女に話し掛けようとするが、
ぐうぐう。

……間の悪いお腹の虫に邪魔されて、気の利いたセリフなど吐けなかった。代わりに、手に持ったモノを掲げて、聞いてみる。

「……おにぎり、食べる？」

彼女は、赤く染まった頬を隠すように頷いた。

これが僕、『桜満集』と、『樫いのり』の出会いだった。

この出会いが、後の僕の運命を変えることになることは、まだ知る由も無い。

そろそろ身体も回復した僕も含め、葬儀社のメンバーは作戦会議室に集まっていた。

涯に、呼び出しを食らったのだ。怒られるかと思つたが、皆もいたのを見て、その不安も霧消した。

「そろそろ時間だな。作戦B 17は覚えてるな、仁？」

「……ええーと、何だっけ？」

「『潜入者の居場所が分からなくなり、尚且つ彼女が動ける場合の合流地点』よ。覚えなさい」

「へーい」

「返事はハイよ！」

はいはい。やれやれ、綾瀬も最近説教が増えてきたな。四分儀並みな気がする。

「という訳だ。仁、ツグミ、お前たちも来い。」

大雲たちは周辺の警戒を。残ったメンバーは、引き続きいのりの捜索を行え。以上だ」

出来る限り簡潔に指示を出すと、涯は手早く戦闘の準備を整えていく。

……妙だな。

涯の様子は、普段の手際の良さより、何処か焦りを感じさせるそれだった。

ははあん、成る程ね。

「おい皆あ！ これから10分きゅうけーい！」

「……はあっ！？」

皆の間の抜けた台詞に苦笑してしまう。僕、そんなおかしなこと言った？

「……ッ、勝手なことを言うな、仁！」

「なあに言ってるの。勝手なのは寧ろお前だろ、涯？」

涯の表情が凍り付く。僕が彼の状態を知ったこと、バレたっぽいな。

「お前、ここ最近寝てないだろ？ 端から見れば分かるぜ、フラッフラじゃねえか」

ま、言われたくないだろうから、適当な理由をつけるけど。

「…………ッ！」

涯は反論出来ない。だって、身体の状態を皆にばらされたくないもん。

「……済まない」

まあ、感謝なんて珍し　って、襟を引っ張るなあ！

皆が困惑する中、作戦会議室の外、近くの僕の部屋に押し込まれてしまった。

「わお、僕襲われちゃう？」

「黙れ馬鹿。それより、不用意にメンバーを不安がらせるような発言は控える」

「ま、お前が無理しないって言うなら、考えてやらないことも無く無くない」

眉根を寄せて、しばし思考した彼は、苦渋の決断を下した。

「取り引き成立だ」

「よしオーケー。じゃ、移動中も寝てるよ？ 身体イカれちゃうぜ」

「ああ……世話になるな、仁」

「水臭いって」

涯の笑顔……中々レアなモノを見せて貰った。

……ちよーっと、やる気、出てきたかも。

王冠の少年（後書き）

集さん登場。アニメ、なんか可哀想な現状ですね！。

麗しき破壊者（前書き）

後書きから読む、って方はネタバレ注意です。

麗しき破壊者

六本木フォート。

今日日、幼稚園児でも『そこには近づくな』と戒められる閉鎖地区である。

それは、アポカリプスウィルスのワクチン接種を拒み、そのためGHQから見放された者たちが住まう無法地帯だから、というのが一般的な知識だけだ。

何の因果か、僕はその六本木フォートに足を踏み入れていた。

「……はあ」

本当にここなのだろうか。出来れば、嘘か冗談であって欲しい。

しかし何度見ても、僕の手の中小型ロボ（ふゅーねるだっけ？）の見せるエア・ディスプレイの地図には、この付近が表示されていた。

辺りを見回す。

夜ということは多分関係無く、閑散としていて、辺りのビルは廃墟のように所々窓ガラスが割れている。

これは確かに、衛生的とは言い難い。

僕はなるべく、住人に見つからないよう気を付けながら、表示されたポイントへ近づいていく。

……何故、僕みたいな臆病な人間がこんなことをしているのかと言えば、話はしばらく遡る。

『取って？』

いのりはそう言って、僕の目の前に綾取りを差し出した。

でも、僕はそれを取れなかった。

他人に触れるのが、他人と距離を近づけるのが、他人に嫌われるのが怖くて。

だから、僕は躊躇った。

『桜満 集は臆病な人？』

まさにその通り。僕はどうしようもないくらい臆病な人間だ。

彼女に指摘されたのがあまりにも情けなくて、僕は自嘲の笑みを浮かべた。

所詮、僕は弱い。だけど、これでいい。いつも通り、いつもと同じだ。

臆病は弱虫らしく、なるべく波風立てないように、人を傷つけ、傷つけられないように、距離を置こう。

いのりは、諦めたように糸を仕舞い、階段を降りていった。

僕は結局、彼女の差し出した糸を手繰ることをしなかった。

もし、あの糸を掴んでいたなら、僕は変わったのだろうか。思考する間もなく、閑散とした部屋に、靴音と機械の稼働音が響いた。

手摺から乗り出してそちらを見ると、白い服を着た屈強な男性たち、銃を構えていた。

一体何が……！？

それを思考するまでもなく、答えは出た。

いのりが、足下に転がされていた。

「や、止めてあげてください！ 彼女、怪我をしているんです！」

僕は思わず叫んだ。彼らの鋭い視線が僕に突き刺さる。

視線だけなら、まだ我慢出来た。だけど、黒光りする銃口を向けられて、足が竦むのを感じた。

「こいつはテロリストだ。庇うなら、お前も処分対象として見なすが？」

「……ッ！」

彼らの瞳は、濁り切っていた。僕がここで反発すれば、それはまるで、路傍のゴミを掃除するように蜂の巣にされるだろう。

結局、僕は何も出来なかった。

我が身可愛さに、命惜しさに、女の娘が乱暴されているのに、何

も出来ない。

「ふん……連れていけ」

幹部らしき、褐色の肌をしたスキンヘッドの男が、部下に命令を下した。

いのりは、そのまま連れ去られてしまった……

腹が立つ。自分の弱さに、情けなさに、臆病さに。

「こんな僕で良いのか……！」

嫌だ……僕だって、たまには自分らしくなく、勇敢でありたい……！

拳を握る僕の足に、何かがぶつかった。……ふゅーねると呼ばれた四足口ボだ。

彼は僕が見るや否や、搭載されたプログラムからエア・ディスプレイを投影する。

それは、地図だった。

東京から六本木フォート、24区までである。その右上の方に、赤い印が見えた。

……ここに行け、ということだろうか。

行き先は、六本木フォート。この近辺で最も性質の悪い、無法地帯だ。

正直、怖い。でも……

「（たまには……自分らしくないことをやれ！）」

これが、僕が変わることの出来る最後のチャンスかも知れない。

そんな気がして、僕はふゅーねるを抱え上げた。

僕らは作戦の集合場所、六本木フォートに到着した。

既に作戦実行員は展開済みで、僕と涯は廃ステージの裏から、ふゅーねるらしき反応の方を見ていた。

しかし、どういつ訳かそこにいのりの姿は無かった。

どころか。

「……なあ涯。『ヴォイドゲノムを第三者が所有する場合』なんて作戦パターン、あつたっけ？」

firstにより活性化された視力が、僕の脳に送った映像は茶髪の少年が、ふゅーねるを抱えて歩いている、というモノだった。

「……碌に作戦パターンを覚えて無いお前に、そんな皮肉を言われるとはな」

苦虫を噛み潰したような表情の涯が、望遠鏡で彼の方を見据え、一つ溜め息をついた。

「あ、まじい」

そんな台詞を洩らした僕の視線の先では、フォートの住民に囲まれる憐れな一般市民君の姿があった。

「しつかたねー、僕が助けに行くけど、異存は？」

「無いな。ただ、手は出すなよ」

「ん、オッケー」

あの子を助ける義理は無いけど、ヴォイドゲノムを持つてるなら仕方無いな。

……最近、仕方無いって言葉よく使うようになってきた気がする。
「助けに行くかね、白馬の王子様を」

現在、僕の周囲を敵ついオニーサンが取り囲んでいた。

その目はキラついて、僕の手の中のふゅーねるを見詰めている。

「寄越せ」

言うと思った。

いつもの僕なら、すぐに財布を出して逃げる。けど、今回ばかりは、そうする訳にはいかない。

「すみません、出来ません……！」

「んなこと聞いてねえ。寄越せ」

恐らくはリーダー格の男の拳が、僕の腹に突き刺さった。

「う、げふっ！」

ツク、痛い……！

けど、これは、これだけは……ッ！

渡す訳には、いかない！

「このッ！」

僕の頭に、金属製の棒……鉄パイプ？ が、振り下ろされる。

痛みで身体は動かないし、あれを受けて無事でいられる程、文化系である僕の身体は丈夫でもない。

死ぬのか、僕は。

何も成し遂げられず、変わることも出来ず、あの娘を助けられないまままで

嫌だ。

生きたい。僕はまだ死にたくない。

「死ぬ訳には、いかない……！」

ようやく覚悟が決まったのに。あの娘を助ける、と。弱かった自分を変えると。

なのに、僕の物語は、始まる前に終わるのか？

無慈悲に振り下ろされる鉄パイプが、眼前に迫る。

……畜生ッ……！

「そうか。なら、死なせない！」

凜と響くは、鈴の音のような美しい声だった。

僕に鉄パイプを振り下ろした男の身体が、真横に吹き飛ばす。

「何だ、お前は！」

まだ七人はいる男たちの攻撃対象は、即座に声の主が変わった。

だが、声の主は僅かに口角を上げるのみ。そこに、恐怖など一分も存在しない。

「退きなよ、脇役」

膝蹴りが、男の顔面を貫いた。

崩れ落ちる彼の頭を両手に掴み、カポエラのように両足で三人の意識を刈る。

一瞬で四人を失い、フォートの住民達は隊型を崩した。

「君のその純粹な思いは、確かに僕が聞き届けた」

二人の腹に、首に、蹴りと手刀が。

残り一人。

「僕の名は大沢 仁」

最後の一人の顎に、裏拳がクリティカルヒットした。

「君に力を貸そう」

瞬く間に八人もの男たちを倒し、僕に手を差し伸べたのは

海のように美しい蒼い長髪の、サイドテールの少女だった。

麗しき破壊者（後書き）

本文、ご拝読戴けたでしょうか。

はい、主人公がまさかの女というね。

僕っ娘というヤツです、はい。

果たして彼女は、誰に靡くのか……

集か、涯か、はたまたアルゴか（ないないW）
八尋ならあるかもね。

六本木フォート動乱(前書き)

ログオフしようとしたら書き上げたのあるの忘れてた……今投稿します。

六本木フォート動乱

「盗んだモノを何処へやった？」
縛って目隠しして放置した挙げ句、開口一番そんな台詞を吐かれる。

多分、声で予想するとさっきの禿げのおじさんだと思う。
こういう時は何も答えない。答えるな、って涯に言われてるから
苛立ちを隠せないらしい禿げた男は、私の頬に冷たい何か 刃
物を押し付ける。

それでも私は話さない。

「……お前が話さないなら、フォートの住民を片っ端から『浄化』
するしかなくなるか？」

下手な脅しだ。『浄化』とは、ワクチンを接種してないフォートの
住民を殺す符丁みたいなモノ。

確かに、彼らは殺すと言ったら躊躇いなく殺す。

でも、私は口を開かない。

涯の、仁の、皆のためだもの。

「……そうか。なら、仕方無いな。お前ら、『浄化』を開始しろ」
その号令を合図に、外から断末魔の叫びが聞こえてきた。

「涯！ 白服の奴等、遂に来やがったぜ！ フォートの住民の命も
お構い無しに実弾をばら蒔いてやがる！」

「そうか、お前も迎撃に迎え」

遂に来たか。まあ、想定内だな。

俺はインカムに手を当て、ヤツに指示を出す。

「仁、G H Qグィンが来た。そいつから『ヴォイドゲノム』を奪って俺に
届ける」

『……簡単に言ってくれんぜ』

「ッ、どうした!？」

仁の言葉から不穏なモノを感じ取った俺は、双眼鏡で彼らのいる位置を確認する。

そこには、青い装甲を持つ量産型エンドレイヴ、ゴーチエが三体いた。

思わず舌打ちする。

仁の実力があれば渡り合えない敵ではない。どころか、thirdを使用すれば難なく倒せるはずだ。

しかし、今のイツがthirdを使えば、副作用で動けなくなる。どちらにせよ、ヴォイドゲノム奪取は不可能だ。

「……少年！ 僕の後ろの路地を駆け抜ける！ 私やいのりの味方がいるから、そいつらに助けを請え！」

……ナイスだ、仁！

インカムがつけっ放しだったのには、こういう意図があったのか。

「さあーで、僕を楽しませてくれよ、人形共」

ガチャリ、と響いたのは、彼女の得物、二挺のアサルトライフルだろう。

secondでやるつもりだ。

ならば、俺も一刻も早く『王の能力』^{チカラ}を手に入れなければなるまい。

secondでは、精々奇襲を掛けて一機倒すのがやっとのはずだからな。

俺はこちらに向かってくる少年 『桜満 集』に視線をやる。

仁と同じ格好をしているこちらに気づいたのか、彼が駆け寄って来たのだが。

「アンタ、それふゅーねるでしょ！ 返して！」

ツグミが横槍を入れてきた。あの馬鹿め。

「ちよつと、これ借りてるモノなんだ！」

「それを借りた女は何処へ行った？」

俺の方を向いた集は、気まずそうに目を逸らした。成る程な。

「見捨てたのか」

「……………ッ！」

別に責めている訳ではない。寧ろ、感情を度外視すれば好判断と言って良い。

が、彼はそこまで豪胆な性質でもないらしい。

「まあ、そいつがあれば問題は無い。ふゅーねるは元々俺たちのモノだ。返せ」

そう言いながら、俺が手を伸ばすと

上空から、小型ミサイルが飛来した。

エンドレイヴの兵器か！

俺は集を突き飛ばした。次の瞬間、ミサイルで吹き飛ばされた鉄塊が俺たちの間に壁を作った。

これでは、ヴォイドゲノムを使えない。

「ど、どうすれば……………！」

ちっ、集も動転してしまっているようだ。

「そいつを手放すな！ 今度こそ、守ってみせる！」

コイツはいのりの事を気にやっている。そこに漬け込むという訳だ……………あまり好きな手法ではないがな。

「……………分かった！」

「良い返事だ！」

俺はツグミに投げ渡された突撃銃を肩から提げると、エンドレイヴの死角に隠れた。

時間は掛けられん。早々に決めさせて貰うぞ……………！

「こん、のおっ！」

アポカリプスウィルスにより活性化された身体能力で地を蹴り、遙か上空に舞う。

エンドレイヴの関節上、首を上げること自体に苦は無い。が、その反応速度はあくまで人間の反応に機械の補正が掛かった程度。

つまり、死角もあれば、瞬きする間も存在する。

まあ、普通の人間がエンドレイヴと人間の神経同調の様を測るの
は不可能と言える。

ところがどっこい、僕の身体は特別だ。

そも、エンドレイヴが操縦者とほぼタイムラグ無しでリンク出来るのは、アポカリプスウィルス研究の途中で偶然発見されたと言われる『ゲノムレゾナンス伝送技術』なるシステムの賜物である。

そして、僕はどういう訳かアポカリプスウィルスを御することが可能だ。

つまり、ちよつと慣れてやれば、敵機の些細な隙や動きの癖を感じることも出来る。

当然、瞬きしている敵の動きも読める訳だ。

ん？ 普通敵の瞬きなんて読めない？

……気にしないでいい気にしない。

ともかく、今はエンドレイヴの迎撃だな。跳躍した身体を捻り、両手を下に向ける。

「喰らいな！」

アサルトライフルの銃口を、右腕関節に向けて乱射する。

だが、やはり通常弾の攻撃は防御されてしまう。

「やっぱ固いねえ。キツッー」

僕が呆れ顔で呟いた直後、三機の『ゴーチエ』は僕を取り囲んで、マシンガンを乱射してきた。

それを結晶の盾を展開して防ぐ、が。

「ぐう……あッー！」

ッ痛……衝撃まで消しきれぬ訳じゃないんだよなあ、これが。

このままじゃやられっ放しなので、脚力強化で一気に上空に飛び上がる。

エンドレイヴ三機の銃撃で、彼らは盾が壊れたところに僕がいな
いことに気づいたらしい。

エンドレイヴの弱点、首裏の関節を狙おうとするが、流石に二度

目の上空からの奇襲には対応されてしまうようだ。

ブレードが僕に迫る　！

こいつは痛そうだ。僕はsecondの力を総動員して攻撃を受ける部分、そしてその反対側にも結晶を発生させた。

が、流石に身体には響く。右手、逝ったかな？

背中へ、あらかじめ展開しておいた盾で無事だけど。

どうやら僕の背中に当たったのは、白服たちのトラックみたいだが……僕が衝突した衝撃で、横転してしまったらしい。ま、敵だから良いけど。

てかこれ、盾に出来るんじゃないか？ エンドレイヴも弾撃ってこないし。

とはいえ、様子を窺ってるだけかも知れないし……はて、どうしたモノか。

顎に手を当てて考える僕のすぐ近くを、何処かで見たとのことのあるナニカが通過した。

赤いひらひらした、まるで金魚みたいな服に、桃色の髪の少女。

……………いのりじゃん！

「ちょ、いのり何でこんなところにいのり！？」

「あ、仁。何でここに？」

「それ先に聞いたの僕！」

と、下らない掛け合いをしていたら、エンドレイヴの連続射撃が襲いかかる。

咄嗟に僕はいのりの盾になり、廃ビルの陰に隠れた。

「このままじゃじり貧だな……………」

僕一人ならどうということもないが、いのりを抱えたまま脱走はちよつと無理がある。

僕はフラッシュ・グレネードを懐から取り出した。

「いのり、僕が囿になってる間に、例の少年を連れて逃げな。出来るか？」

「うん」

「いー返事だこと。んじゃ、3、2、1！」

数え終わると同時、僕はピンを抜いて、フラッシュ・グレネードを放った。

夜の中に突然太陽が生まれたかのごとき閃光。それが止むと同時、僕といのりは駆け出した。

いのり……武運を、な。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1647z/>

罪の王冠と破滅の黙示録

2011年12月20日00時53分発行